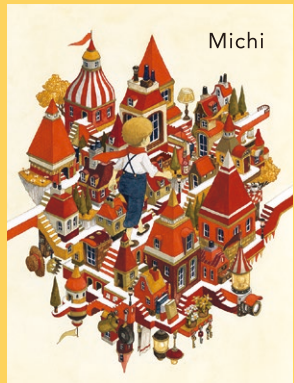


# 絵本 Vol.7 いいね!

今回の「いいね!な絵本」は

『Michi』  
junaida・著  
福音館書店



今回のいいね!な絵本は、第53回造本装幀コンクールで日本書籍出版協会理事賞(児童書・絵本部門)を受賞した福音館書店の『Michi』を紹介します。「表と裏」の概念をもたず、前後どちらからでも読めるこの絵本。テキストはなく、細かに描きこまれた絵の力だけで物語が進みます。画家として活躍するjunaidaさんが本作を思いついたきっかけや、なぜ絵本という表現形式を選んだのかを聞きました。

junaida(ジュナイダ)さん

ハル・ユデルさん

## 道って本来、続いているけど終点はないもの

優れた本の装幀を競う造本装幀コンクールで、入賞を果たした『Michi』。絵本の誕生秘話や作品の魅力、作者のjunaidaさん(以下、ジ)とデザイナー担当のハル・ユデルさん(以下、ハ)に伺います。



造本装幀コンクール入賞、おめでとうございます。

お二人 ありがとうございます。

ジ 今回の受賞はデザイナーのハルさん、編集の岡田望さんとともに手にしたと思っています。『Michi』は僕にとって、一つの物語を一冊で表現した初の絵本。3人で面白がりながら形にしたことが理解されて、賞を受けたとしたら、本当にうれしいです。ね、ハルさん? ハ うん、そうですね。私としても、作っていくプロセスがとても楽しかったです。

どちらの表紙からも読み始められる「表も裏もない」のが、本書の特徴です。アイデアはどうやって生まれましたか?

ジ 「道」をたどる「ってというテーマで本ができないかな」と思ったのが最初です。ただし、ゴールは作りたくなかった。道って本来、続いているけど終点はないものですから。それなら、歩いていて誰かに会ったり、何かを見つけたたりす

ることがクライマックスになったらいいのかなと考えていって、両方向からスタートする今の形になりました。ハ 私は下絵の段階から少しずつ見ていたんです。もう、ワクワク。ジ ハルさんには初期から相談にのってもらって、深めていったんですよ。僕たちはもともと友達で、彼は僕がデザインで大切にしていることをすごくよくわかってくれているんです。打ち合わせでは全然関係ない話もしましたが、それで作品の方向性が見えることも多くて。ハ プライベートの時間と変わらない感覚だったね。楽しんで仕事できました。

コンセプトは初めから一貫していたようですが。



ジ そうなんです。「両側から読める絵本で、読者が世界に没頭できるような情報をそぎ落とす」のが、今回のコンセプトでした。合紙のコンセプトという方法は、それを達成するための選択。本を開いたとき、左右のページが同じ一枚の紙なので真ん中で絵柄がとぎれることがありません。だから、物語に没頭している読者が現実に戻されてしまうことがないのです。そもそも絵本という形式を選んだのもコンセプトを体現するためでした。まずアイデアがあつて、ベストなやり方を探していくのがいいと思っています。

ハ コンセプトの存在は、デザインをした私にとっても大きかったですよ。原画を受けた時、これまでのjunaida作品とはまた違うすばらしさを感じました。「デザインしたのに見えない」ようにデザインするものが、私のスタンス。コンセプトを念頭に紙や書体などを決めて、作品にふさわし



た。デザインしたのに見えない」ようにデザインするものが、私のスタンス。コンセプトを念頭に紙や書体などを決めて、作品にふさわし

い形にできました。ジ さっき「3人で面白がりながら」作ったと言いましたが、それもゆるぎないコンセプトが最初にあったからできたことかもしれない。進めるうちに左右対称の本にしたいくなり、そうなるのと奥付も2つ作ってシンメトリーにした方がいいけれど、それっておかしいかな? みたいな話が出たんです。あるいは、表紙に作者名を入れないでもいいよね? なんて相談もありました。そういう時、3人の意見がびたっと一致して進んで。ハ それぞれ立場は違うけど、ゴールは見えていました。おかげでストレスなく、好きなことを追いかけて作れましたね。

息の合った3人が、遊ぶように形にしたのが本作だったのです。最後に、読者の方にメッセージをお願いします。

ジ 開く度、違う何かが見つかる絵本です。楽しみ方に決まりはありません。自分なりの道のりを楽しんでください。Junaidaさん、ハルさん、ありがとうございます。

### いいね!な絵本を作った人

←左 junaida(ジュナイダ)さん

画家。1978年生まれ。京都在住。Hedgehog Books and Gallery代表。ポローニャ国際絵本原画展2015入選。

←右 ハル・ユデルさん

グラフィックデザイナー。イギリス出身。母国で自身が設立したレコードレーベルClearのレコードジャケットデザインを手がけ、1996年より日本で活動。子ども向け絵本のデザインは今回が初。







作品のアイデアを聞いたときは、  
えらいことになったぞと!

岡田望さん



junaidaさんから作品のアイデアを聞いたとき、尋常ではなく鳥肌が立ち、これはえらいことになったぞと思ったのですが、受け取った原画は、そんな予感を軽々と越え、とんでもないところまでとり着いていました。内容はもちろん、その内容が具体的な形態として表現される造本も含め、本のありようは、色々なものからもっともっと自由であっていいのだということ、この作品が改めて教えてくれました。

いいね!  
な絵本を編集した人

岡田望さん

福音館書店編集者。  
暑すぎたり寒すぎたり  
しないほうがよいです。



©Tsuchika Nishimura

## 女の子は右から、男の子は左から ページの境目で絵が途切れない、道の絵本

『Michi』は、両A面絵本です。一方の表紙を開けば女の子が歩き出し、もう一方の表紙を開けば男の子が歩き出し、それぞれに物語が始まります。どちらから読んでも、もちろんOK。心ゆくまで物語に没頭できるのは、本書が製本にまでこだわって

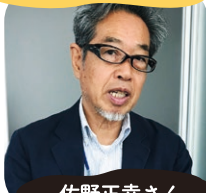
るからです。『Michi』では「合紙製本」という方法を採用。見開き絵を紙の片面に印刷し、23枚のそれらをすべて絵柄を内側にして二つ折りして、外側同士を貼り合わせています。このため、本の綴じ目で絵柄が分断される心配がありません。



佐野正幸さん



いいね!  
な絵本を印刷した人



佐野正幸さん

図書印刷株式会社所属、プリンティングディレクター。「原稿の色をどう紙面に再現するか」を軸に、作者、編集者、デザイナーの間を取り持って、最適解を日々探る印刷色の専門家。

蛍光ピンクが必須と、  
ひと目で判断しました

初めて原稿を見た時、朱色とブルーが鮮やかなので、両方を美しく出せる蛍光ピンクのインキが必須と判断しました。この本は5色印刷がベストです。調整の途中では「原画で表現したはずの微妙な濃淡や質感が出ていない」とjunaidaさんからの指摘も。修正して実機校正を出しつつ、実際にお会いして詰めていきました。

仕事にあたる際には、私自身が自分を貫く必要がありますが、同時に相手の話をよく聞き、引き出しを多く持つことも重要です。

望月啓史さん



いいね!  
な絵本を形にした人



望月啓史さん

一枚絵として見せるため  
「折」に細心の注意を

『Michi』では絵に描かれた道を造本の都合で途切れさせないように、見開きで印刷できる合紙製本を採用しています。片面に絵柄を刷って二つ折りにした板紙同士を貼り合わせる方法ですが、ページの折り目には注意が必要。折り目が目立って道を邪魔してしまわないよう、折工程では細心の注意を払っています。

こうした工夫の生きた本書はもちろん、図書印刷では工場製本するすべての本の品質を、繊細な目で管理しています。

図書印刷株式会社所属。沼津・川越両工場製本に携わり、現在は商材開発部に所属。自社工場内の設備を用いて、これまでにない新しいサービスを開発するべく、日々奮闘。



『Michi』のお求めはお近くの書店等にお問い合わせください。

